

強者の戦略

【解答例】

ソクラテスの良心の呼び声は、守護神であるダイモニオンの声ともいわれ、心に直接、呼びかける声であり、その内容は善悪に基づく声、すなわち「～してはいけない」という警告をうながす呼び声であり、彼は、しばしばこの声に酔いしれていたといわれている。一方、ハイデッガーのものは、人生の本目的を見失い、日常に埋没するダス＝マンに対し、死への存在へと覚醒をうながす声、すなわち、本来の生へと呼び覚ます声と定義した。
(199字)

解説

なかなか重いテーマではありますが、率直に二人の立場を区別することから考えていきましょう。

- 1.ソクラテス:「よく生きる」ことを説いた哲学者
- 2.ハイデッガー:実存主義(いまを生きる、生ききる、「死」一点を見つめ、本来の生を取り戻すべく1分1秒を完全燃焼して生きるという考えの)哲学者

つまりは、ハイデッガーの場合は、問題文の「実存」という言葉そのものが、ヒントとして与えられていたものであったわけです。

次に、それぞれの人物を取り巻く倫理用語を、ここではわかりやすく整理してみましょう

- 1.ダイモニオン:守護神(自分自身をよき方向へと導いてくれる存在)
- 2.①ダス＝マン:ひと、ただのひと、世人(現実逃避に生きるひと、今楽しければそれでよいと考えるひと、「存在」そのものに向き合おうとしない

ひと)

②死への存在:「死」が確定した上でこのように生を受け、「死」に向かう自覚がある者

という意味合いになります(より細やかな説明は、用語集や教科書、参考書を参照してくださいね)。

つまりは 1.はいわゆる良心の呵責から来るもので、2.は真剣に生き抜こうとする意志から来るもの、言い換えれば、1. やってはいけないこと、2.やらねばならないこと、と考えてみて、その時、自分自身にささやく、もう一人の自分の声を、ソクラテス、ハイデッガーがそれぞれの「良心(の呼び声)」と定義したわけです。このことに気づくことができれば、もう正解したも同然です。

ソクラテスの恍惚(こうこつ)するその姿はよく目撃されていたようなので、字数に余裕が生まれれば、これを記すことにすればよいと考えます。受験生の皆さんにとっては、受験勉強の真っ只中、その本目的である勉強をさしおいて、ゲームセンターでゲームをしている時や、カラオケルームで、熱唱している時などに聞こえてくるであろう、ハイデッガーの「良心の呼び声」の方が、まさに重く、響くのではないのでしょうか。かくいう、わたし自身も、後者の方が「ドキッ」とします。ハイデッガー的に、実存主義チックに、松岡修造さんのように、「イキテユキタイモノデス」ね。